

戦前の教育制度は基本的に男女別学だった。戦後、日本国憲法が男女平等をうたい、男女共学の学校が増え、地区に女子校の青森県立青



津軽新城駅から旧国道へ出て西高に向かう女子高生＝1965（昭和40）年頃、
『はるかなる道』（西高創立三十周年記念誌）より転載。

森西高等学校（西高）が開校した。

当時の新城周辺に至る道路交通事情は、まだ西バイパスがなく、現在ほど整備されていなかった。多数の女性が通学する交通環境を整えようと、西高が青森市に働きかけ、1964（昭和39）年4月6日より、奥羽本線の青森駅と津軽新城駅を結ぶ各駅停車の列車が走るようになった。

女子高生の専用列車

が走った時代

中園裕

（県民生活文化課
県史編さんグループ主幹）

当時の奥羽本線は未電化で、蒸気機関車の引く列車が1日1本、朝の通学時間帯に青森駅と津軽新城駅の間を走った。まだ新青森駅はなく、僅か一駅区間を走る列車で、休日は運休した。誰でも乗れたのだが、大半が西高の女子高生だったため「西高専用列車」と呼ばれた。

蛇の列を作った。行列の先頭が学校に到着しても、最後列はまだ駅構内にいたという。西高生の登校風景は新城地区の風物詩だった。にぎやかで華やかな行列は男子高生たちの羨望の的だった。

1971（昭和46）年10月2日、奥羽本線が電化された。乗車時間が10分から8分に縮まったが、車内が彼女たちの大切な「社交場」であることに変わりはない。

部活動などの影響で校内の序列意識が高まった1980年代、専用列車の車両は学年ごとに分けられるようになった。

3年生は駅舎と跨線橋に近い最後尾の車両（当時は青森駅寄り、今は逆）に乗り、その前が2年生、1年生と続いた。3年生の車両に乗り込んだ新入生が、慌てて1年生の車両へ乗り移る光景も見られたという。

津軽新城駅は新青森駅が出来るまで、西高の通学駅として大勢の女子高生でにぎわい、朝と放課後は「女の園」と化した。恥ず

かしがる若い男性職員を、ちよつとからかったこともある彼女たちだが、卒業時に駅へ感謝の記念品を贈り続ける礼儀を持ち合わせていた。

女子高生たちの思い出を詰め込んだ専用列車は、1985（昭和60）年3月14日のダイヤ改正で姿を消した。その後、彼女たちは現在と同様、他の乗客と一緒に弘前行きの列車に乗った。翌年11月1日、新青森駅が誕生すると、大半の女子高生が同駅を使うようになり、津軽新城駅の利用は激減した。

現在の西高は男女共学になって久しい。人口減少が進む中、全国的に見ても女子校自体が激減。女子校も歴史の中で語られる時代になったのである。西高は歴代の先生やOBの方々を中心に記念誌を編さんするなど、資料的に恵まれている。しかし記念誌以外に、多くの西高OGの証言がなければ本稿は成り立たなかった。感謝を申し上げたい。歴史資料の整理や保存と同様、人びとの証言も大事な歴史資料であることを痛感する。